

No.46

北海道ブロック支部 NEWSLETTER

発行
2025年9月

JPCA2025北海道大会が開催されました！

6月20日(金)～22日(日)に、第16回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会が開催されました。「そこ・そこ」のプライマリ・ケア～それぞれの場で、ふさわしくあるには～をテーマに、大会長を務めたブロック支部長の本佐先生を先頭に、支部一丸となって準備を進めてきました。その結果、今大会は過去最高の6327人の参加者を集め、大盛況のうちに幕を閉じました。今回のNEWSLETTERは、そんなJPCA2025に関わった方々に寄稿していただいた特集号になります。ぜひお楽しみください。

大会長 挨拶

第16回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会を開催して

第16回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会 大会長
日本プライマリ・ケア連合学会北海道ブロック支部支部長
本佐 健悟
(JA北海道厚生連二セコ羊蹄広域倶知安厚生病院総合診療科)



第16回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会（通称JPCA2025北海道大会）の現地開催が終わりました。この文章が読めるようになる9月末にはオンデマンド配信も終了し、学術大会が正式に終了します。今回の学術大会の北海道開催にあたり、北海道ブロック支部の会員の皆様をはじめ、多くの方に大変お世話になりました。実行委員の皆様、一般演題の査読や座長を引き受けていただいた方、シンポジウムや教育講演、インタラクティブセッション、インタレストグループで企画をしたり登壇していただいた方、金曜日企画やソーシャルアクティビティ、おもてなしなどでご協力いただいた方をはじめ、多くの方にお世話になりました。また北海道開催ということで、お忙しい中会場に運んで足を運んでくださった方も多くいらっしゃると思います。過去最大の現地参加者数となり、大変盛況でした。

今回、北海道で開催することで、全国の皆様に北海道のプライマリ・ケアの魅力や多様な側面が伝わったのではないかと思います。また、北海道ブロック支部という観点では、今回の学術大会を機に知り合いが増えたり、準備や当日のセッションを通して、新たに課題に気づいたり、今後の活動へのヒントを得た方も多いのではないかと想像します。

(次ページに続く)

発行人

支部長 本佐 健悟 北海道ブロック支部事務局（市立美唄病院内）

TEL:0126-63-4171

mail:hpca.jimukyoku@gmail.com

学術大会の熱気を大事にして、2025年11月の北海道プライマリ・ケアフォーラム、来年2026年6月の北海道地方会をはじめとした北海道ブロック支部の行事でまた皆様とお会いして学びや交流ができれば嬉しく思います。また今回留守番や用事などで参加できなかった方も支部の行事でお待ちしております。

北海道大会の特徴の1つとして、金曜日企画【「そこ・そこ」前日祭】として、関係の皆様のご協力の元、金曜日に札幌市以外の北海道内の各地で企画を用意しました。おかげさまで参加者からも大変好評で、準備に当たった方からも、地域の魅力を再発見したり、交流の良い機会になったと言う声をいただきました。金曜日企画を振り返るシンポジウムを翌土曜日に開催しましたが、現地に行くことでわかるもの、現地に来てもらうことでわかるものがあり、交通の便の良い札幌開催も良いが、時々札幌市以外でもブロック支部の企画をするのが良いのではないか、というディスカッションがありました。北海道ブロック支部では、札幌市以外での企画として「ミニ地方会」を2019年2月2日に名寄市で開催しましたが、コロナ禍により次回が中止となり、オンライン参加という選択肢が登場したことで、中止のままになっていました。「ミニ地方会」以外にも、例えば数年に1回地方会を札幌市以外で開催するなど、いろいろな方法が考えられますので、新たな「現地に行く・現地に来てもらう」スタイルをブロック支部の幹事会などでも議論していきたいと思います。

改めまして学術大会に多くの皆様のご協力をいただいたことに感謝申し上げます。
ありがとうございました。

JPCA2025 ザ・大会の裏側！

この特集では、JPCA2025の裏側をご紹介します。この「ザ・大会の裏側！」と題し、運営委員の皆様からのエピソードトークを集めました。ぜひお楽しみください。

ザ・大会の裏側 “テーマ誕生秘話 ～「そこ・そこ」が生まれるまで～”

第16回学術大会のテーマ【「そこ・そこ」のプライマリ・ケア ～それぞれの場で、ふさわしくあるには～】。このテーマにたどり着くまでに、何ヶ月もの時間を要しました。

北海道での開催が決まり、まず最初に取り組むべきはテーマの設定だと引き継ぎを受けました。一般的な学術大会のテーマは、学会のトレンドや時代の潮流を反映したもの、あるいは大会長の専門分野やライフワークを掲げるものが多いですし、地域性を前面に押し出すケースもあります。私はこれといった得意分野は作らずに学会活動をしてきましたので自分の特徴が何なのか見えておりませんでした。過去の学術大会とテーマが重ならないようにすると、使える言葉にも限りがあり、深く悩むことになりました。この行き詰まりを打開してくれたのが、実行委員長をお願いした佐藤弘太郎先生でした。私のこれまで、勤務先の倶知安厚生病院やJPCA北海道ブロック支部での仕事の進め方や大切にしてきたことについて丁寧に聞き取ってくださり、議論を重ねる中で「それぞれの地域で、ちょうどいい塩梅で実践を続ける」というコンセプトが浮かび上がってきたのです。そして、この「ちょうどいい塩梅、ほどよい、適



度な、ふさわしい」を表現する言葉を探す旅が始まりました。類義語辞典を何度もめくり（実際にはネットでの検索ですが）、数えきれないほどの言葉を検討しましたが、そんな中、見つけたのが「そこそこ」という言葉でした。一見すると少し投げやりな印象を受けるかもしれませんが、使う人や受け取る人によって意味合いが変わる「あべこべ言葉」だからこそ、むしろ目を引くのではないかという結論に至りました。さらに、ただの「そこそこ」ではなく、中点（・）を入れることで「それぞれの場」という意味を際立たせることにしました。「そこ・そこ」に込めた意味がわかりやすくなるように、「それぞれの場で、ふさわしくあるには」をつけることにしました。こうして、テーマは「そこ・そこ」に決まったのです。

当初、テーマが誤解されないかという懸念もありましたが、一般演題や企画を公募してみるとテーマの真意をくんだ発表が多数寄せられ、大変嬉しく思いました。テーマが変わることで前回や前々回とは違った視点の企画ができましたので、それも良かったです。私は大会長やテーマが変わることで、いろいろな企画ができたり、それぞれにあった参加の仕方ができるので、5年分くらいの学術大会で1セット、というような見方をしてもらえたら良いのでは？、と考えています。北海道地方会もそのような考え方で、いろいろな方に実行委員長をお願いしています。学術大会のテーマ、って覚えていないことが多いですが（私もそうでしたが）、今度からぜひテーマにも注目して参加してみてください。

(大会長：木佐 健悟 JA北海道厚生連ニセコ羊蹄広域倶知安厚生病院総合診療科)

ザ・大会の裏側 “一般演題とポスターのカテゴリ決め”

採択された演題の抄録を読み込み、似たようなテーマの演題をグループ化して、1会場あたりの発表数の上限である10演題をまとめていく地道な作業である。新たなカテゴリとして“COVID-19関連”“学校との医療連携”“外来看護/訪問同行看護”“孤独に関するケア”が抽出され、より似通ったテーマの発表が同じ会場でなされ、学術的な交流の促進に寄与してもらえたなら嬉しい。また症例報告では、簡単なものから複雑なものへと発表順番もできる限り配慮した。医学的な知識はもちろん、ある程度の総合的な素養も必要であるため、事務局をお願いできないものの、仕事のボリュームが多いタスクの1つである。今後、実行委員の中に、質的研究の経験者がいると、わりあいお願いしやすいかもしれない。

ザ・大会の裏側 “栗山元監督の動画”

当学会理事長から栗山監督の話を聞きたいな、来てもらえないかな、との発案で調整を始めた。たまたま室蘭にて子供向けの講演があり、2024年8月に栗山監督に直接お会いしてお願いした。その後、2025年2月にキャンペーンしないと予定はわからないとのことで、栗山監督の著作を2冊読んでみた。そこで選手に手紙を書くことがあるという話があり、シーズンが終わった24年12月に手紙を書いて当学会へ講演に来てもらえるように改めてお願いした。25年2月キャンペーンして、秘書の方に電話したところ、台湾ヘドラフト候補の選手の視察へ行くため難しいという返答であった。が！無料で挨拶動画を作ることはできるので盛り込んで欲しい内容を連絡して欲しい、とっていただいた。なお当日、開会式で流れた2分強の動画が、その成果である！誠実に医療者へねぎらいの言葉をかけていただいております、素晴らしい！と思った。理事長の感想は・・・まだ聞いていない。

(実行委員長：佐藤 弘太郎 本輪西ファミリークリニック 院長 / 北海道家庭医療学センター)



ザ・大会の裏側 “金曜日企画「そこ・そこ前日祭」函館コース”

函館コースを担当した湯浅です。函館コースは20日の「そこ・そこ前日祭」が待ちきれずに、前日祭の前日祭まで開催してしまいました。函館市内で行われた前日祭の前日祭には全国から14名が集まり、函館の海の幸を堪能しました。中でも盛り上がったのは、飲み放題メニューに含まれていた北海道限定のカツゲン、ガラナ、リボンナポリン。次々と注文した結果、店内のカツゲンとガラナは飲み切ってしまいました。腹を満たした一行は、そのまま函館山に登り夜景を鑑賞。函館稜北病院の川口先生が、函館市長（大泉洋の兄）に裏で手廻ししてくれたため、見事に晴れて最高の前日祭の前日祭となりました。

もちろん20日の前日祭当日も午前のワークショップに始まり、市電貸切、五稜郭公園観光と大いに盛り上がった2日間になりました。ちなみに北海道にお住まいの皆さんには、函館のミスタードーナツが全国の定価より30%近く安いことは「常識」ですよ？

(金曜日企画「そこ・そこ前日祭」函館コース担当：湯浅 駿 順天堂大学総合診療科)

ザ・大会の裏側 “ミッションインポッシブル JPCA2025 - 懇親会会場バス輸送大作戦”

2025年6月、JPCA2025実行委員会“おもてなしチーム”に託された最大のミッション——それは、札幌コンベンションセンターから懇親会会場・札幌パークホテルへ、数百人にのぼる参加者を時間通りに移送することだった。目的はただ一つ。18時35分から始まる厳粛なオープニングセレモニー「アイヌ古式舞踊」に、全員を間に合わせる。開演後は一切の入場を禁じる“完全閉鎖”。遅れは許されない。

バスは片道20分。タイムリミットは18時発の3便。緻密に立てられた計画。しかし大会初日の熱気と余韻に包まれた参加者たちは、なかなかバス乗り場に現れない——。それでも、1便・2便は無事出発。残るは3便。1台目、2台目はギリギリ出発。しかし…最後の1台が、まだ出ていない。18時10分、予定を超過。その報を受けたのは、S副実行委員長。瞬時に脳内をよぎるリスクと勝算——そして、決断。「出す！」と叫び、バス乗り場に走り出す！目撃したK実行委員いわく、「S先生の背中には“情熱大陸”のテーマが流れていた」と語る。まさに運命を懸けた現場判断。問題のバスには、アイヌ舞踊を心待ちにしていた学会の重鎮N先生の姿も。S副実行委員長はバス運転手に「即出発してください！」と一喝。時間との一騎打ちが始まった。

その頃、ホテルでは誘導係の実行委員が、悠々と歩く参加者に「間もなく始まります！急いでください！」と叫びながら会場へ誘導。実行委員のグループLINEは、各現場からの緊迫した実況で燃え上がる。そして18時34分——最後のバスがホテルに滑り込み、全員が会場に入ったと同時に、K大会長の「はじめます」のLINE投稿でドアが閉まり、オープニングセレモニーが始まった。

静寂の中、始まるアイヌ古式舞踊。灯りが落ち、厳かな空気が満ちる。誰もがその神聖さに息を呑み、心震わせた。クライマックスでは、約400名が輪踊りに加わり、手をつなぎ会場全体が一つになった。演舞中の入場を禁じたため、会場入り口の左右の扉にはN実行委員とO実行委員が仁王立ち。まるで「阿」と「吽」のごとく、外界からの一切の干渉を遮った。その姿は、JPCA2025の伝説として語り継がれることだろう——。

(交流チームリーダー：山口 章江 十勝勤医協 帯広病院 薬剤科長)



2025年 南郷先生EBM勉強会 in 旭川医科大学

2025年8月2日(土)、3日(日)と南郷栄秀先生にいらしていただき、EBM勉強会を開催することができました。昨年度に引き続き、旭川医科大学での開催は今回で2回目になります。今回は夏休み期間中ということもあり、東医体の時期と重なり、参加者さんの半分は医療者の先生方で構成されていました。その中、土曜日と日曜日の2日間にわたり、大変興味深い内容をレクチャーしていただき、実際にグループでディスカッションする機会もあり、盛況でした。

土曜日はEBM診断のレクチャーで、感度・特異度や尤度比のお話をしていただき、そこから事前確率や事後確率がどのように求められるかを学びました。大学の授業でも取り扱われている内容でしたが、当時は難解でとっつきにくい領域だなと感じていました。ところが、南郷先生が説明してくださると、実臨床ではどの点に注目して学びを深めていけばよいかを私たちもとても楽しくわかりやすく学びを深めることができました。

また、日曜日は巷の健康情報に騙されないためのEBMの活用方法を教えていただき、これまた目から鱗が何枚も落ちる体験をさせていただきました。特に日曜日は本学の学長にもいらしていただきEBM教育の大切さを参加者全員で味わえた1日になりました。南郷先生、今年度もご多用な中、私たち学生のため、そして医療者のために貴重な勉強会を開いていただき誠にありがとうございます。また来年度もぜひともたくさんの学生・医療者のみなさまをお呼びしてEBM勉強会を開催したいと考えています。

北海道ブロック支部若手医師学生支援委員会 旭川医科大学5年 大軒 悟



リレーコラム

毎月、北海道ブロック支部でさまざまなキャリアで活躍されている方たちに気まますに日常をつづってもらっています。今回は、西村 涼先生（道北勤医協一条通病院）のコラムです。

こんにちは。北海道旭川市にある道北勤医協一条通病院で総合診療医をしております、西村涼（PGY6）です。今回は、当院で始まる新しい研修についてご紹介します。

当院では来年度から「KAMUI総合診療」というプログラムを新規に開始予定です。特徴は、藤田医科大学総合診療プログラムを始めとした全国のプログラムと連携しながら、臨床・教育・研究を一体的に学ぶことです。これにより、地方にしながら全国レベルの教育資源とつながり、幅広いキャリアの選択肢を得られる環境を整えています。

研修医にとって最大の不安は「自分に医師としての力が本当に身につくのか」という点だと思います。当プログラムでは、急性期から回復期、在宅医療や緩和ケアまで、あらゆる局面を経験できるので、総合的な診療力を確実に養えます。現場での経験を基盤に、他プログラムとの合同カンファレンス、外部講師を招いた定期的な勉強会を通じて、学問的な裏付けを持ちながら成長できることも安心につながります。

一方で、専門医研修を終えた若手医師の多くが抱えるのは「この先、自分はどんなキャリアを描けばよいのか」という不安です。当プログラムでは、教育カリキュラム作成や指導医体験を通して“教える力”を磨く機会を用意しています。教育力を身につけることは、将来大学や地域研修プログラムでのキャリアを広げる大きな武器となります。また、他プログラムや学会のワーキンググループとのコラボレーションを通じて、自分に合った仲間を見つけてもらう、といったサポートにも力を入れています。

もし「医師としての力を着実に伸ばしたい」「キャリアの次の一步を見つけたい」「仲間を増やしたい」と感じている方がいらっしゃいましたら、ぜひ一度旭川に見学にいらしてください。地域の実臨床と全国の教育資源が融合する現場を体感いただけたらと思います。



北海道ブロック支部 広報委員会 編集後記

今回で担当2回目の小山裕基(手稲家庭医療クリニック 専攻医3年目)です。11月15日には第12回北海道プライマリ・ケアフォーラムが開催されます。私も認知症体験ワークショップの企画に携わり、その一環で「認知症世界の歩き方 公認ファシリテーター」を取得しました。若手医療者・学生を中心に鋭意企画中(私は「若手」ではないですが...笑)で、他にも興味深い企画が目白押しです。ぜひご参加ください！
